

産業革命と英国社会

一九～二〇世紀イギリス、キリスト教社会主義の源流に迫る!!

基督教友愛新聞

発行所：
白十字キリスト教
社会主義研究会
(http://www.ichthus.net/css)
発行人：
倉井 香茅哉 (独立系研究者)



写真：英国教会、カンタベリー大聖堂
(c) claudiiodivizia/iStock by Getty Images

今回は、産業革命以後の欧州に生じた変化をふまえて、一九世紀イギリスの動向を概観し、キリスト教社会主義運動の黎明期について解説しよう。

一八一〇年代、イギリス労働者のラダイト運動を皮切りに、全国の工業都市において、機械の大量破壊や工場への放火など、計画的な暴動が広がった。同様の運動は、

一八四〇年代のドイツ織物労働者、フランスの絹織工などにも波及していったが、これらの運動は、機械の資本主義的利用による人間労働力の疎外にこそ問題の根幹がある、という視点を欠いていた。一八三四年、ロバー

ト・オーウエンの指導による全国大合同労働者組合は、創立後数週間以内に五〇万人を組織したが、統制の欠如によつて年内に崩壊した。

労働組合運動に失敗した英国労働者たちは、しだいに政治運動へと方向づけられていった。一八三四～一八四九年にわたるチャーティス

ト運動は、人民憲章に基づく普通選挙の獲得を要求するだけでなく、普通選挙を手段として、労働者階級が政治権力を握る社会革命を志向した。

英国教会、アングロ・カトリックの指導者たちによる社会運動の系譜

ここで特筆すべきは、黎明期のキリスト教社会主義運動には、英国教会の社会運動に向けたアプローチとしての側

面があったという点である。一八三三年にはじまったオックスフォード運動以後、アングロ・カトリックとも呼ばれる高教会派の指導者たちは、現世を肯定的に解釈する「受肉」の神学に基づいて、精神的・内面的な救済のみを強調する福音派(低教会派)と対立していた。クリミア戦争を経て、一八八〇年代には、聖マタイ・ギルドをはじめとする多くのキリスト教社会主義団体が設立さ

秩父地方を視察 (第2回)

SLパレオエクスプレスで行く時空の旅。武甲山を仰ぐ秩父の大地に、46億年の地球の歴史、自然、人々の生活を眺めた。

一月七日(土)に秩父を再訪した。今回の目的は、蒸気機関車パレオエクスプレスに乗車することだった。早朝に今井館聖書講堂を出発し、飯能行きの西武線を経由して、午前九時すぎに西武秩父駅に降り立った。到着後、まずは高台の羊山公園まで歩いた。道に迷ったが、その土地の生活を垣間見るには、「道に迷ってみる」に限る。ようやく辿り着いた公園からは、山にかこまれた秩父の風景を一望できた。また、公園内に

は武甲山資料館がある。古来、土着的な信仰の対象であった武甲山は、近代以降、石灰岩の採掘地として人々の生活を支えた。ちなみに、SLパレオエクスプレスの名前は、二〇〇〇万年前の秩父地方に生息していた海獣パレオパラドキシアに由来するという。午後、汽車の窓から見上げた武甲山の勇姿に、数十億年に及ぶ地殻変動を経て形成された日本列島と秩父地方の年代記を想った。天候にも恵まれ、良い旅になった。

また、キリスト教社会主義者を自認している。現在、英国のEU離脱、米国のトランプ大統領就任など、グローバルイシューに対抗する動きが活発化していくなか、キリスト教社会主義の再検討は、国際情勢に対する真正面からの応答となりうるのかもしれない。

PINK SHIRT DAY 2017
In 蒲田
～差別の壁を取り外そう～
2017年2月19日(日) 17:30～
会場：蒲田教会(日本基督教団)
主催：ピンクシャツデー2017実行委員会 in 蒲田
後援：イクトウス・プロジェクト

【補足記事】「まこととに慚愧に堪へない」右のコラム(秩父視察記)に関して。お昼過ぎ、蒸気機関車が三峰口駅に到着し、束の間の休憩時間となったとき。駅前で、山菜そばを「美味しい」と夢中でたべていたら、「転車台を用いた機関車の入換風景」を見損ねてしまった(ー)。

天帳院日記

まだ大学院生の頃、『椎名麟三研究』第二十号〈終刊号〉に収められていた恩師・斎藤末弘先生の文章に、先生の親友・宮野光男氏のことを「クリスチャン学者の典型的な人物」と評する一文をみつけた。創作に対する情熱を抱いていた大学生/院生時代、当初は「学者」という言葉にそれほど魅力を感じていなかったが、この「クリスチャン学者」という言葉に出会った瞬間、シビレしてしまった。自己自身、クリスチャンとして誠実に生きると同時に、キリスト教の神学・信仰・文化を冷静に研究する、云わば二重の生真面目さを引き受ける人格的イメージに憧れを抱いた。

二〇一七年、「学問と芸術」から「教育と福祉」へ。さらに、それらを根柢において支える「科学と信仰」を想起しなくてはならない。真理は円形にあらざる、楕円形である。冷静と情熱、その二重性の調和を旨としたい。

告知

フョイエルバッハ読書会

(第1回 白十字の会・定期読書会：キリスト教社会主義×ヘーゲル左派)

テキスト：フョイエルバッハ『キリスト教の本質(上・下)』
(岩波文庫)

【プログラム】

開会
倉井香茅哉「キリスト教社会主義概論1」
参加者一同「フョイエルバッハ読書会」
休憩
質疑応答、議論、問題提起
閉会

(全体で2~3時間程度を予定)

【その他、参考図書】

イマヌエル・カントの信仰的著作
ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』
ダーフィット・シュトラウス『イエスの生涯』
フョイエルバッハ『キリスト教の本質』
マルクス『資本論』
カール・バルト、パウル・ティリッヒの各著作
19世紀英国における産業革命とキリスト教社会主義
『新紀元』同人、賀川豊彦らのキリスト教社会主義
内村鑑三、無教会の伝道者たち
その他
(順不同)

日時：2017年2月18日(土) 14時~17時

(途中入退室可。会場は一般の喫茶店ですので、ご都合のよい時間帯にお越し下さい。)

場所：喫茶店「白十字」(〒186-0004 東京都国立市中1-9-43)

※会場の喫茶店「白十字」と読書会の主催団体「白十字の会」は一切関係
ありません。お問い合わせは、css.hakujuji@gmail.com お願いします。

※本読書会は、学術的関心に基づく有志の集まりです。主催団体名に「キリスト教
社会主義」と銘打っておりますが、「信仰の有無・教派の別」等は一切問いません。

主催：白十字キリスト教社会主義研究会